

東山地区 日本語教育小学校部会 〈研究の経過と概要〉

(1) 研究テーマ

豊かな表現力の育成

～伝え合う力を高める指導の研究～

(2) 研究テーマについて

「伝え合う力」は、人間が社会的な存在として自立するために欠くことのできない力である。人間関係が希薄になっている現代社会であるからこそ、伝え合う力を育てていくことは、よりよい人間関係を築いていく上でとても大切なことである。

また学校生活での子ども達の実態を見ても、言葉によるコミュニケーション能力不足から、人間関係をうまく築けなかったり、トラブルを起こしたりする場面が多く見られる。学習面でも、話し方や聞き方をきちんと身につけることが全ての教科にかかわる学びの力となってくる。

これまでの研究では、「伝え合う力」を高める指導として、「話すこと・聞くこと」領域の中で、対話やインタビュー活動、調べたことを発表する活動などの授業実践を通して、話す力や聞く力を高めるための手だてを学ぶことができた。

また、過去6年間の研究においては、領域を限定せずに国語科全体の中で伝え合う力を高める指導法のあり方について実践にとりくみ、話し合いにおける形態の工夫や児童の実態に即した題材の設定、書いたものを活用しながらの対話の実践などを行い、伝え合う力を高めることができた。

そこで、今年度も継続してここ数年来の研究の成果と課題を踏まえ、研究実践を行うことにした。昨年度の課題として出された、子どもたちの考えを深め表現力をはぐくむための音声言語と文字言語が有機的に関わるような学習形態・指導法・教材の開発を継続し、深めていきたい。また、「言語能力」とはどのようなものであるかを明らかにし、児童につけたい言語能力に合わせた言語活動の開発にもとりくんでいきたい。

(3) 研究の経過と概要

日程	研究内容
5月 8日	組織作り、研究テーマの決定
5月15日	年間計画などの決定
6月 5日	授業研究についての検討
8月 5日	学習会「伝え合う力を高める指導」 講師：雨宮弘志教頭先生（東雲小）

8月30日	授業研究 詩を楽しもう 「わたしと小鳥とすずと」「みいつけた」 3年生 授業者：佐藤 多恵（井尻小）
10月 2日	実践報告 各自が研究テーマに沿った形での実践を持ち寄り検討

（5）今次地区教研で論じられた問題と今後の課題

- 国語科の「話すこと・聞くこと」以外の領域でも伝え合う活動を取り入れていき、単元や毎時間のねらいにせまることができる。
- 詩などは、授業をきっかけとして興味や関心を持つ児童も多い。単元が終わっても、日常の中で詩などに触れる（音読する）機会を持てるように工夫し、言語感覚を育てていくとよい。
- 単元を貫く言語活動を設定することで、学習の大きな目標を児童に持たせ意欲を継続させていける。言語活動の充実と開発にとりくんでいきたい。
- 話し合いの型や伝え合いの型を低学年から高学年へと系統的に積み上げていけるように教材研究していきたい。
- 「話すこと・聞くこと」の言語活動を仕組むとき、相手意識が大切。発表する、伝える相手を明確にしてとりくませることで児童の意欲も高まり、言葉を選ぶときに適切な表現を遣うことを意識するようになる。

（6）報告書作成参加者

雨宮 弘志	(牧二小)	今澤 真澄	(加納岩小)
松岡 めぐみ	(加納岩小)	広瀬 友理	(日下部小)
佐藤 清美	(日下部小)	岡村 理恵	(後屋敷小)
岡村 太郎	(日下部小)	中村 悦子	(塩山南小)
行田 玲子	(日川小)	本宮 知子	(塩山南小)
前田 文	(塩山南小)	渡邊 満智子	(塩山南小)
村田 奈緒美	(塩山南小)	中根 絵里	(奥野田小)
佐藤 多恵	(井尻小)	菊島 敬子	(菱山小)
荻原 幸菜	(玉宮小)		

実践報告 詩の学習を通して「伝え合う力」を高める実践

はじめに

子どもたちの日常の様子を見てみると、言葉によるコミュニケーション能力を高めていくと
りくみが必要だと感じている。各教科等において言語活動の充実が叫ばれる中、国語科では「話
すこと・聞くこと」領域でなくても、「伝え合う力」を育てる機会を増やしていくことはでき
ないだろうか。そんな思いから、今回の実践を行った。

第3学年 国語科学習指導案

授業者 佐藤 多恵

1 目指す言語能力

詩の構成やテーマがよく分かるように、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して音
読する力

2 単元名 詩を楽しもう

教材名 「わたしと小鳥とすずと」 (金子みすゞ 作)

「みいつけた」 (岸田衿子 作)

3 児童の実態

男子15名 女子7名 計22名の学級である。単級のため、子どもたちは1年生の時か
ら同じ学級集団で学校生活を送っている。元気いっぱいな子どもたちで、自分からすすんで
友達に関わろうとする児童が多い。しかし、自分の主張を相手に押しつけてしまったり、自
分の意思を相手にうまく伝えられずに気持ちが行き違ってしまったりして、トラブルになる
こともしばしばある。

4月に行ったNRT検査の結果からは、偏差値平均49.2であり、「話すこと・聞くこと」
(特に「話すこと」と「書くこと」)に課題があることが明らかになった。県が行った学力
把握調査の結果では、県の平均を約8ポイント下回り、こちらも同様に特に「話すこと」「書
くこと」で課題が残った。また、語句や文及び文章の構成に関する問題も正答率が低かった。

「話すこと」については、日直がテーマに沿ったスピーチを行っている。2～3文のスピー
ーチが多く、話題の広がりには欠けるものが多い。また、どのように話していいのかわからず
に困惑してしまった児童も見受けられたため、簡単な構成を示して指導している。

授業中の発言は、すすんで挙手する児童が半分ほどいる一方で、ほとんど挙手しない児童
が5、6人いる。

「聞くこと」については、相手の顔を見て聞く、黙って最後まで聞くことを指導している
が、手いたずらを始めたり、机に伏せてしまったりする児童も数人いる。5月に行った「よ
い聞き手になろう」という単元では、話題に沿った質問や感想を言うことは難しい実態があ
ったが、話し手へ質問したり感想を伝えたりすることはほとんどの児童ができていた。

「話し合うこと」については、あらかじめノートに自分の考えを書かせ、隣同士で発表し
合う機会をつくると、ほぼ全員が自分の考えを伝えることができる。子どもたちは友達の考

えに興味を持っている。しかし、スムーズに伝え合ったり話し合ったりすることはペアによって差がある。

「書くこと」については、自分の気持ちや考えを書く場面では積極的にとりくみ、表現しようとするが、文章構成を意識して書くことまでは難しい。また、調べたことを報告する文章を書く学習では、調べたことをまとめて表現することが非常に難しく、読み手に分かりやすいように表現できた児童は5人ほどであった。

「読むこと」については、叙述をもとに登場人物の性格や気持ちの変化を読み取ったり、情景を想像したりしながら読む学習を進めてきたが、読む力には個人差がある。読書量にも同様に個人差があるのが現状である。音読については、家庭にも協力してもらい、宿題でとりくんでいる。会話文の読み方やオノマトペの表現の仕方を工夫する児童がいる一方、拾い読みに近い音読になってしまう児童もいる。

【アンケート形式による児童の意識調査】 1～7（6月4日実施） 8～9（8月27日実施）

	質問事項	回答(人)			
		いつも好き	たまにどちらかという人喜欢	あまりどちらかという嫌い	まったくきらい
話す	1 みんなの前で話すことは好きですか。	6	10	3	3
	2 自分の伝えたいことを分かってもらうために、話し方に気をつけているかききます。				
	① 声の大きさ	11	9	2	0
	② 話す速さ	13	7	2	0
	③ はっきり話す	10	11	1	0
	④ 話す内容	8	13	1	0
聞く	3 話を聞くことは好きですか。	7	14	1	0
	4 話を聞くとき、相手の話が分かるように聞き方に気をつけているかききます。				
	① 最後まで	12	8	2	0
	② 話している人の方を向いて	8	12	2	0
	③ 自分の考えと似ているところや違うところを考えながら	10	10	2	0
	④ 分からないことやよいところを考えながら	11	8	3	0
話し合う	5 話し合うことは好きですか。	10	10	1	1
	6 話し合うときにどんなふうになっているかききます。				
	① 自分の意見を言う	6	11	5	0
	② 自分と似た意見が出たとき、賛成意見を言う	6	11	5	0
	③ 自分と違う意見が出たとき、反対意見を言う	0	8	7	7
	7 登場人物の気持ちや場面の様子などを読み取るときに、話し合うことをどう思いますか。	楽しい 10	どちらかという楽しい 9	あまり楽しくない 3	楽しくない 0

			分かる	どちらかという と分かる	あまり分 らない	分からない
			1 3	6	3	0
詩 の 学 習	8	詩の学習は好きですか。	6	1 3	1	2
	9	詩を音読するのは好きですか。	1 0	8	4	0

4 単元（教材）について

「わたしと小鳥とすずと」は、三連で構成されている。第一連と第二連は、形のうえからも意味のうえからも対になっている。第三連は、それをまとめている。三音、四音、五音を基本としているが、それらが単なる繰り返しに終わっていないために、独特のリズムが生まれている。この作者の詩の大きな特徴は、詩の形式もさることながら、柔らかな感性や繊細な語感にある。この詩自体は、音数といい、対の形といい、形式的にも理解しやすいが、形を追って無味乾燥な解釈にならないようにしたい。「みんなちがってみんないい」の意味を考える活動を通して、自分自身の生活を振り返り、一人一人の感じ方や考え方に違いがあることに気づかせたい。児童の活動においても、音読を繰り返す時間を確保するなど、留意したい。

「みいつけた」も、三連で構成されている。形式的には、第一連と第二連の行数、四つのものを並べて表現しているところは同じである。第一連は各行が六音節と五音節から成り立っている。作者が海辺で見つけた「小さい」ものの様子が並んでいる。第二連は、第一連に対して部屋で見つけたものが四つ表現されている。初めの三行は、音節の数はそろわないが、各行全体では十一～十三音節になっている。第三連は二行から成り立っている。題名と同じ言葉で余韻をもって終わっている。詩の空欄部分を考えさせることで、詩のイメージを膨らませ、主題に歩み寄せたい。

「わたしと小鳥とすずと」「みいつけた」はいずれも、三連で構成された詩である。二作品とも連ごとに内容のまとまりがはっきりしており、連の意識を持って詩を読む学習に適している。また、二つの作品が並ぶことで、それぞれの詩の特徴やテーマがよりよく理解できる。読み比べることを通して、それぞれの詩のよさを味わい、そこから感じられたことや作品に対する自分の考えなどを自由に話し合わせたい。また、どちらの詩も形式が整っていて読みやすいため、何度も音読しているうちに、自然とリズムが体になじみ、イメージも膨らませやすい。イメージを聞き手に伝えるにはどのような言葉の抑揚や強弱、間の取り方がよいのか、考えさせるのにふさわしい作品である。一人一人の感覚を大事に、読みの工夫を考えさせたい。さらに、どちらの詩も、普段わたしたちが気に留めないようなこと・ものに視点を当てた作品である。ともに、小さいもの、弱いものを決して見捨てず、それぞれのよさや存在を認め、大切にするという価値観に裏づけられている。そうした優しいまなざしに、児童も共感を覚えることだろう。

【5つの言語意識】

- 目的意識 ・ 詩の音読発表会をする
- 相手意識 ・ 友達に音読を発表する
- 方法意識 ・ イメージが伝わる音読の工夫を考える
- 場面・状況意識 ・ ペアや班で音読を聞き合う
- 評価意識 ・ ワークシートや音読から

【言語活動例】 物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。(ア)

5 子どもたちに本単元を通してどのような力を育てていくかについて

この単元では、二つの詩の構成やテーマがよく分かるように、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して音読することをねらいとしている。二つの詩の似ているところや違うところを考えさせ、それをもとに音読の仕方を考えさせる活動を通してねらいに迫っていきたいと考える。

本教材の「わたしと小鳥とすずと」では、児童は初めて「連」という言葉に出会うが、これまで経験的に理解してきた「詩の中のまとまり」を、「連」という言葉とつなぐことが大切である。その際、詩の構成に着目させるような発問を取り入れていきたい。また、リズムに乗って音読を楽しみながら、「みんなちがってみんないい」の意味を考えさせたい。「みいつけた」では、「ちいさい」という言葉の部分を空欄にし、その言葉を考える活動を通して子どもたちのイメージを膨らませたい。また、繰り返し出てくる「て」に着目させ、リズムよく読む中で、小さなもののよさや存在を認め、大切にする価値観に気づかせたい。

二つの詩の構造や内容、受け取る印象などを似ているところや違うところとして比べることで、それぞれの詩の特徴やテーマを理解させ、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意した音読へとつなげていきたい。

また、学習活動にペアで伝え合う活動を取り入れることで、児童の読みを深めたり、考えを広げたりしていきたいと考える。その際のポイントとして、①話し手の考えを受けとめる、②話し手に質問する、③聞き手に具体的に話す、の三点を意識させていきたい。

6 指導計画と評価計画（C領域「読むこと」）

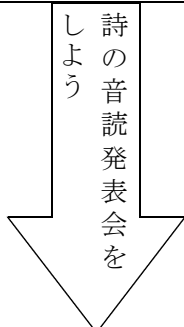
(1) 指導（単元）の目標

詩の構成やテーマがよく分かるように、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して音読することができる。 【読むこと】(1)ア

(2) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	読む能力
①詩を工夫して音読しようとしている。	①音読の工夫をさがしながら聞き、質問したり感想を述べたりしている。(エ)	①詩のそれぞれの連の内容とその関係、テーマを理解している。(ウ、オ) ②詩の場面や内容の中心がよく分かるように、音読している。(ア)

(3) 単元構成表 (C読むこと) 「詩を楽しもう」

言語活動	指導事項	重点	主たる学習活動	評価規準
	ウ文章の解釈		1・「わたしと小鳥とすずと」を読み、特徴を見つける。	関① 読①
	ウ文章の解釈		2・「みいつけた」を読み、特徴を見つける。 ・二つの詩を比べる。	関① 読①
	ア音読	◎	3・音読の仕方を考え、練習する。 ・音読発表会をする。	読② 話聞①

(4) 指導計画 (総時数 3時間)

次	時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準と評価方法
第一 次	1	①学習課題を設定する。 ②「わたしと小鳥とすずと」を音読し、特徴を見つける。	<ul style="list-style-type: none"> ・「詩の音読発表会をしよう」という学習課題を立て、関心を持たせる。 ・「詩の中のまとまり」＝「連」であることを理解させる。 ・「わたし」「小鳥」「すず」がどの連に出てくるのか考えさせながら、それぞれの連の働きや詩の構造について考えさせる。(三連, リズム, 対) ・「みんなちがって、みんないい」にこめられた意味を考えさせ、ペアになって自分の考えを伝え合わせる。 ・詩の構成や内容に注意しながら音読させる。 	<p>【読】詩のそれぞれの連の内容とその関係、テーマを理解している。(ワークシート①)</p> <p>【関】詩を工夫して音読しようとしている。(行動観察・ワークシート①)</p>
	2	①「みいつけた」を音読し、特徴を見つける。	<ul style="list-style-type: none"> ・「みいつけた」の空欄部分に入る言葉を考えさせ、詩のイメージが膨らむようにさせる。 ・それぞれの連の働きや詩の構造について考えさせる。(三連, 繰り返し, リズム, 場の変化, 余韻) ・小さいものばかり見つけている人はどんな人か考えさせ、ペアになって伝え合わせる。 ・詩の構成や内容に注意しながら音読させる。 ・二つの詩を比べて、似ているところや違うところを考えさせる。 	<p>【読】詩のそれぞれの連の内容とその関係、テーマを理解している。(ワークシート②)</p> <p>【関】詩を工夫して音読しようとしている。(行動観察・ワークシート②)</p>
	3	①ペアで音読の工	・その詩を選んだ理由についても伝えら	【読】詩の場面や内

第 二 次	本 時	夫を伝え合い、 アドバイスし合 う。 ②班ごとに音読発 表会をする。	れるようにする。 ・学習した内容をもとに、音読の仕方を 工夫させる。(抑揚・強弱・リズム・ 間の取り方等) ・友達のアドバイスをもとに、再度音読 の工夫を考え、練習する。 ・発表の仕方・聞き方を提示し、めあて をもたせる。	容の中心がよく分か るように、音読して いる。(音読・ワー クシート③) 【話・聞】音読の工 夫をさがしながら聞 き、質問したり感想 を述べたりしている。 (付箋・行動観察)
-------------	--------	--	--	---

7 本時の展開

(1) 日時 2013年 8月30日(金) 5校時(2:00~2:45)

(2) 場所 甲州市立井尻小学校 3年教室

(3) 学習内容 お互いの音読を聞き合おう

(4) 本時の目標 ・詩の内容や、感じられたイメージがよく分かるように、音読することが
できる。
・音読の工夫をさがしながら聞くことができる。

(5) 展開

過程	学習活動と内容	指導及び留意点	評価規準(方法)
つ か む (3分)	1 「わたしと小鳥とすずと」「み いつけた」を各自音読する。 2 音読発表会をすることを伝える。 3 学習課題を確認する。 ・詩の内ようやイメージが伝わるように、くふう して音読しよう。 ・音読のくふうをさがしながら聞こう。	・掲示した2編の詩を見なが ら、振り返らせる。	
ふ か め る (15)	4 各自、音読の工夫を確認する。 ・ワークシート①または②を見 て、音読する。 5 ペアごとに音読を聞き合い、工 夫を伝え合う。 ・ペアの右側が音読する。 ・左側は音読を聞いた感想や 見つけた工夫を伝えたり、 工夫を質問して確認したり する。 ・右側は左側の感想や質問を もとに、赤鉛筆で音読の仕	・伝え合いの仕方を説明し、 掲示する。	【読】詩の場面 や内容の中心が よく分かるよう

分 ～ 6	方を再度考える。 ・同様に左側も音読する。 各自、アドバイスをもとに音読の練習をする。		に、音読している。(音読)
発 表 す る ～ 20 分 ～	7 班ごとに音読発表会を行う。 発表するとき ・詩の内容がよく分かるように、はっきり音読しよう。 ・詩の内容や、イメージが伝わるように工夫して読もう。 聞くとき ・音読の工夫をさがしながら聞こう。 ・班の1～4の順に発表していく。 ・1人が発表したら他のメンバーは、工夫してあるところや良かったところを付箋に書き、発表者にひと言言いながら渡す。 ・発表者は発表が終わったら、振り返りシートを書く。	・発表の仕方、聞き方を提示し、めあてをもたせる。 ・振り返りシートを配る。 ・詩を選んだ理由を言ってから発表させる。	【読】詩の場面や内容の中心がよく分かるように、音読している。(音読・ワークシート③) 【話・聞】音読の工夫をさがしながら聞き、質問したり感想を述べたりしている。(付箋・行動観察)
ま と め る ～ 7分 ～	8 数名が音読を発表する。 ・工夫をさがしながら聞く。		

(5) 評価

- ・詩の場面や内容の中心がよく分かるように音読しているかを、友達からの付箋や音読の様子、ワークシート③から見とる。
- ・音読の工夫をさがしながら聞き、質問したり感想を述べたりしているかを、付箋や行動観察から見とる。

《資料》 ワークシート①

わたしと小鳥とすずと
金子 みすず

わたしが両手をひろげても、
お空はちっともとへないが、
とべる小鳥はわたしのように、
地面をはやくは走れない。

わたしがからだをゆすつても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのよう
にたくさんうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい

詩を楽しもう① 「わたしと小鳥とすずと」を読もう
三年 番号前 ()

第 ()

第 ()

第 ()

第 ()

○この詩のいいなと思うところはどこですか。理由も書きましよう。

ワークシート②

みいつけた
岸田 稔子

なみ つめたくて
たね こぼれて
くも うかんで
おし はついている

えんぴつのしん ひかつて
すなのつぶ ちらばつて
いとくす すこし おちていて
あとは なんだかしらない こみ

きようは 物のばかり
みいつけた

詩を楽しもう ② 「みいつけた」を読もう
三年 番号前 ()

○小さいものばかり見つけている人はどんな人でしょうか。

○この詩のいいなと思うところはどこですか。理由も書きましよう。

ワークシート③

詩を楽しもう③ おたがいの音読を聞き合おう
二年 番号前 ()

発表・詩の内ようがよく分かるようにはっきり音読しよう。
聞く・音読のくちやをさがしながら聞こう。
友だちからのカードをはなそう。

二、自分の音読をよりかえろう。
・詩の内ようがよく分かるように、はっきり音読できましたか。
よくできた できた もう少し
・詩の内ようやイメージがかわるように、くちやして音読できましたか。
よくできた できた もう少し

8 授業を終えて

(1) 授業者の反省

- ・暑い中での授業であったが、落ち着いて学習していた。
- ・詩に対してあまり馴染みがなかった子どもたちであったが、今回の学習を通して詩に親しみを感じるようになった。
- ・詩のイメージを伝えるために音読を工夫させたが、付箋を見ると、そこまでは深まっていなかった。めあてが的確に示せなかったり、子どもたちとの確認が不十分のまま活動に進んでしまった。

(2) 研究討議より (成果と課題)

○児童が音読の工夫や良いところを見つけようと、よく聞いていた。

- 聞き手がさがした音読の工夫点を付箋に書き、発表者に伝えたことで、発表者に評価が見えやすかった。付箋が有効に活用されていた。
- 音読発表会のとりくみを通して、音読することに自信が持てた子どもがたくさんいた。
- 詩の学習が好きになった児童や、詩に興味を持つ児童が出てきた。
- 最後の2人の児童の発表によって、「工夫」の視点がはっきりした。
- 「工夫」を、3年生がとらえることが難しい。聞き手に、「自分がやりたいことが伝わるのが嬉しい」という児童の反応を大切に、お互いに伝え合いながら確認できた段階で今回は良いのではないか。
- 学習の流れや活動の手順が明確で分かりやすかった。
- 音読の「工夫」の意味が、子どもたちにどこまで理解されていたか。もっと具体的に示すべきだった。最後に2人の児童が全体の前で読み、他の児童が工夫をさがして発表した。その活動を先に行ってから班ごとに音読発表会を行えば、音読の「工夫」や、聞くときのポイントのモデルとなり、良かったのではないか。
- 交流で、音読の「工夫」ではなく、詩のイメージを大切に話をさせていくことが大切。「この読み方から、こんなイメージが伝わってきた。」という風に付箋を書かせれば良かった。
- 付箋に、「こうすれば良くなる。」という内容も書ければ相手に伝わりやすい。発表者に、自分の読み方が良かったのか悪かったのかが、分かるようにさせたい。
- 発表者から、「この詩を選んだ理由は…です。だから、…の部分でこう読みたいです。」ということ伝えてから音読してもよかった。聞く方は、「こう読んでくれたから、こう伝わった。」と言えれば良い。
- 2つの詩は、工夫しようとする表現が難しかったかもしれない。

(3) 児童の感想

- ・詩がおもしろくて、もう一度やりたいです。
- ・ぼくはこの詩を読めてよかったです。はじめてくふうしてしっかり読めてうれしかったです。
- ・またもっとくふうして詩を読みたいです。
- ・家や学校で、音読の練習をたくさんしたから、友だちにつたわってよかった。
- ・音読がにがてだったけど、ちょっととくいになりました。
- ・2つの詩を読んで、2つとも「リズム」がありました。わたしは「わたしと小鳥とすずと」をよみました。理由は、リズムがとりやすいからです。もっとたくさん詩を勉強したいです。

おわりに

今回は「読むこと」領域の中で、本時の目標を達成するための手だてとして、伝え合う場面を取り入れた実践を行った。「話すこと・聞くこと」領域でなくても、「伝え合う力」を育てる機会をつくることができる。付箋を使った活動も効果的であった。ただ、今回の実践はめあての説明や確認が不十分だったために、評価が十分できなかったことが残念であった。今後も引き続き、「伝え合う力」を高める指導について研究を重ね、日頃の授業に生かしていきたい。